一期一会の邂逅人生

～人生は自分探しの求道の旅

第三章　青年期

34　打谷 久義

必ずしも灰色生活ならず心豊かなれど

必死ではあった受験浪人の頃のちょっとした心の余裕が作り上げたもの

日記そのものは小学校4年生の頃より、几帳面（きちょうめん）な祖父の感化もあったのか、母にも義務付けられて、ぼちぼちに付ける習慣が身に付き出して以来、今日まで一日たりとも欠かすことなく、手帳などに日記だけは、たとえ一行でも書き続けている。

節子との交際問題が両家の両親間の問題にまで発展した時に、実家に置いてきた私が読みふけり読み込んだ相当量の本や参考書、それにノート類、書類などのぎっしり詰まった小さな書斎部屋も整理解体されたため、23歳頃までの物、また、私に関する資料などは妹に焼き捨てられたので、残念ながらそんなには残っていない。

ついこの間終わったばかりの、大評判だった朝ドラの「あさが来た」の広岡信五郎と浅子との許婚（いいなずけ）どころか、親の命令結婚で相手を決めるという、そういう頃と大同小異の考えが強く残っていたのか、特に私のように長男が婿入りするのはなおさらだった。

広岡浅子さんはわずか2歳で加島屋の信五郎さんと許婚の関係を親が決めていたようで、実際17歳で、その筋書き通りの結婚。その時分は階層に応じた相手が、女性はごく幼少の頃から決まっている場合が普通だったそうだ。

だが、戦後も20年が過ぎたというのに、田舎の農家では学歴もほどほどに、長男はよくできてもできなくても、丈夫な体に産んでもらった以上は、農家を継ぐのが当然と思われていた頃だけに、当時にあっては、浪人までして大学への進学はもちろん、まだ長男坊主が他家へ養子や婿養子、あるいは養嗣子に行くこと自体が、両親、兄弟、親戚上げて大反対だった。

相続、特に財産権の発生する養子や婿養子にはためらいがあって、せめても養嗣子程度に収まるならばと、実家における長男の立場の面子（めんつ）も考慮し、若者なりに矜持（きょうじ）を示したのではあるが、それが私の青年期の波乱の人生の元凶となったり、長男はあくまで長男らしく家督を相続し、維持することに努めよ！　とは言わずもがな、私より5つ下の、今でもそうだが当時一番の人気清純スター（日活）だった。

誰に歌ってもらいたいか合う勇気もなくて、机の引き出しの中の「明日香路の恋」も影響を与えたであろうと思われるほんの数句をここに列記する。

▽　▽　▽

「思うこと」「随想」「受験生として」など、中学2年頃より、受験雑誌に結構な数を投稿していて、残るものは少し残っているのだが、何せコピーのなかった時代だけに、本文は相手方に送ってあるので、今となってはそうそう残ってないのが残念である。捲るめく私の人生絵巻が、もう少し充実したものとして書きたいのだが、そうは易々（やすやす）に問屋は卸してくれない。

特に浪人時代に、憧れに憧れて、耳成山の頂上より、明日香方面を見て、2日間かけて作った「明日香路の恋」の作詞は、生まれてから最初に魂を打ち込んだ詩で、春・夏・秋・冬の四番までの歌詞を作曲したり、紙袋やファイルの中に眠っているもの、あるいは本のページの間になぐり書きしてはさんである紙片、没にしたもの以外で、日記などに書き残した随想の一遍なり、青春時代の私の心情を少しは吐露し、その後の考え方や生き様（ざま）にも影響を与えたであろうと思われるほんの数句をここに列記する。

紙面の都合で、誰にも理解してもらい易（やす）い下手くそなその頃の川柳でも披露して、にやりとお笑いいただけたならば結構でございます。（原文のまま）

・万葉の　育て人あり　文化栄（映）え（気休みに、よく石舞台まで自転車で駆けて）ー教えられもした仲間を想いて）

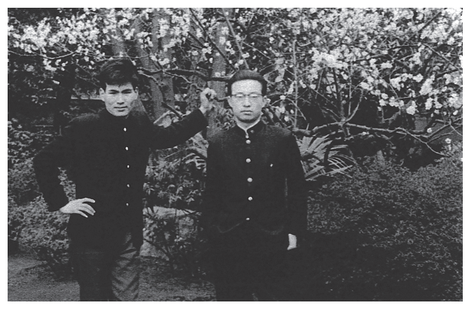
・二人して　木枯しの吹く田舎道（私の自宅から耳成山麓の送り道で）

また、破り捨てた「明日香路の恋」の、いくつかの文言の断片をうっすらと覚えてはいるので、列記するも、大とこころの内側から魂に熱く働きかけてはくれない・ビブラートしないのであろう。

私にしては、作詞の内容はかなり広大無辺な歴史のロマンを書き上げたものだった　残念至極である。

（打谷石材会長）

＝毎月第1、第3週連載＝



渋谷区南平台は、1200坪を有した秋山邸（東洋精糖創業者）でお世話になっていた頃（現ダイヤコスモ社長の吉川清好氏と）

・南平台　泊りて浴食　百寿邸（かつての岸首相の私邸近くの、約1200坪の秋山邸に、有り難いことに勉学のために居候中に）

・秋の日に　錦に染まる　山紅葉（南禅寺の疏水路から嵐山散策の折）

・学び連れ　何処まで縁が続くやら（家庭教師で、教え教えられもした仲間を想い）

・二人して　木枯しの吹く田舎道（私の自宅から耳成山麓の送り道で）

また、破り捨てた「明日香路の恋」の、いくつかの文言の断片をうっすらと覚えてはいるので、列記するも、大とこころの内側から魂に熱く働きかけてはくれない・ビブラートしないのであろう。

私にしては、作詞の内容はかなり広大無辺な歴史のロマンを書き上げたものだった　残念至極である。

（打谷石材会長）

＝毎月第1、第3週連載＝

好評連載中「一期一会の邂逅人生 ～人生は自分探しの求道の旅」

「読者に元気与えたい」著者・打谷氏、今後の展開語る

本紙の長期連載シリーズ「一期一会の邂逅人生～人生は自分探しの求道の旅」はまもなく開始から1年5カ月が経過する。石一筋40余年の打谷石材会長、打谷久義氏（76）が波乱万丈の人生を振り返ってつづった自伝だが、ざっくばらんな語り口調のスタイルが読者に好評で反響も大きい。話はいよいよ第3章の青年期に突入し佳境を迎えつつあるなか、今後の展開などについて打谷氏に話を聞いた。

インタビューに応える打谷氏

―少年期を読ませてもらって当時の情景が鮮明に浮かんでまいりました。非常に熱がこもっていますね。

「私は久義という名前ですが、幼少期には他人からぼんちゃんと呼ばれていました。あの頃は、遊びでも勉強でも他人を引っ張っていかなあかんという意識が強かったですね。それも単にガキ大将としてではなく、大人との付き合いでもそうでした。

私は耳成山で育ったものですから、はっきり言って井の中の蛙です。ですが若い頃はとにかく五感で知識を吸収していきました。幼少期のことはカメラ以上の鮮明さで記憶に残っています」

―読者から楽しく読んでいますとの声も頂戴しています。

「ありがたいことです。連載が30回を過ぎた辺りから、がぜん力が入るようになりました。最近ではベストセラーにしてやるというぐらいの意気込みで打ち込んでいます」

―若い頃は文学青年だったとか。

「そうでした。昔、明日香路の恋という題の歌謡曲を作詞したこともあります。清純派スターに歌ってもらおうと思ったのですが、どこへ持っていけばいいのか分かりません。そうこうしているうちにその人の婚約が発表されたもんですから落胆してしまって歌詞自体も破り捨てました。そういう話を愉快に感じていただけるのかもしれません」

―自伝を通じて、読者に何を最も伝えたいですか。

「読者に元気を与えられたらうれしいですね。実際は読者から昔を思い出して若返りましたとの声をいただくこともあって、私の方が励まされています」

―昔の子どもは勉強だけでなく、親の手伝いもせねばならず、今よりもずっと忙しい日常を送っていました。

「大変忙しかったですね。畝傍高校の進学コースに通っていた頃、春と秋に中間考査があるんですが、うちの親父は田植えとか稲刈りを手伝えと言う。普段勉強してるんだからそこそこの点数取れるだろうと。それで点数が悪くても親父は次頑張ればいいって。本当にあの頃はゆったりと時間が流れていて、時間に追われるという感覚ではなかったです。忙しかったですが無限の時間の広がりがありました」

―昔は今よりもずっと寛容の精神がありました。

「ありましたね。自伝を書いてつくづく思うんですが、昔はいい時代でした。いじめもありましたけどそれほど陰湿ではありませんでした。いつも仲介役となる先輩がいて、その先輩が間に入ってくれていたから後腐れするようなことはなかった。謝ったらそれで終わりです。さっきまで泣いていた子が1時間後には泣かせた子と一緒に遊んでいるという光景が普通でした」

―今は何を見ても感動を示さない子が増えた気がします。

「それもあります。私は富士山を初めて見た時に心臓が止まるのではないかというくらいに感動しました。30歳代でチベット・ヒマラヤの頂上に登った際にはそこから果てしなく広がる山々を目にしてこれこそ極楽浄土だなと感じたこともありました。

いまの時代は考えられないことがたくさんあります。その一つが墓じまいです。今生きている人は先祖のDNAを受け継ぎ、そして次の世代にそれを渡していくという考えを大切にせねばなりません。自分さえよければよいという人が多すぎますね」

―なぜ自伝をお書きになろうと思われたのですか。

「最初にこのコーナーをお引き受けになった山口昌紀近鉄会長（現近鉄グループホールディングス取締役相談役）の自伝を読んで、とても私には書く資格がないと思ったのですが、小は大に向かって精進していけばよいと考え、さらに私は二番手だという気軽さもありました。また、私のこれまでの生きざまが誰かの励みになればとの思いもあって引き受けさせていただきました」

―自伝ではいよいよ青年期に入りました。今後どのような展開が待っているのでしょう。

「汗と熱です。社会人としてどのような一歩を踏み出し、そこからどう現在に至るのか。まだまだ一山も二山もあります。私は名僧に諭されて石材の道に進みましたが、本当にいい道を歩ませてもらったと感謝しています。その話も今後どこかで出てくるでしょうから楽しみにしていてください」

―まだまだ意気盛んですね。

「私はこれまで4200回以上講演してきましたが、そこでいつも我が人生に定年なしと題した話をさせていただいています。しかし、80歳代が間近に迫ってきまして、そろそろ代表取締役を退いて息子に本格的にバトンタッチをしようかと考えていたのですが、社員から我が人生に定年なしという言葉はどうなるのかって言われましてね。そうか、それなら一生現役を貫いてやろうと、そう決心したばかりなんです。

しかし、女房に愛想を尽かされることなく、会社も左前にならずによくここまで来ることができたと感無量になることもあります。後世に礎を残せるようにもうひと頑張りしたいと思います」

―ありがとうございました。

執筆中の打谷氏

打谷久義氏の足跡

- 昭和15年　3月8日、旧磯城郡耳成山で生まれる
- 昭和30年　桜井市立桜井中学校卒業
- 昭和34年　県立畝傍高等学校卒業
- 昭和37年　中央大学法学部入学
- 昭和39年　中央大学中退
  「石工ほど崇高な仕事はない」と高僧から諭され、地球の骨格を形成する石に携わることを生涯の生業にすることを決意
- 昭和40年　打谷石材に入店、石工見習として技能を磨く
- 昭和50年　打谷石材代表取締役に就任
  スローガンは「小さくてもいい、良い会社をつくろう」
  「先祖学」を講じ、このころから全国各地での講演活動をスタート
- 昭和59年　1月、県職業能力開発協会技能検定委員を委嘱される
  7月、職業訓練指導員（石材科）の免許を取得
- 昭和62年　「全国優良石材店の会（全優石）」加盟
- 昭和63年　2級土木施工管理技師技術検定に合格
- 平成5年　県知事より、技能検定委員功労者表彰を受ける
- 平成6年　石匠位の認定を受ける
  中央職業能力開発協会の表彰を受ける
- 平成7年　墓道の師範免許取得
- 平成18年　職業能力開発で、厚生労働大臣功労者賞受賞
- 平成19年　4月、打谷石材会長に就任
- 平成25年　全国石匠位会会長に就任
- 平成26年　4月、瑞宝単光章（技能検定功労）を受章

未来（あす）の奈良へ新たな可能性

奈良日日新聞

毎週金曜日発行

月額購読料 860円　1部 220円

購読・バックナンバーのお申し込みは

0800-500-2121

http://www.naranichi.co.jp